

頭頸部に好酸球性皮膚炎と皮脂腺炎を認めた猫の1例

小嶋大亮[†] 小嶋恭子 太田和美 小嶋佳彦新潟県 開業 (小島動物病院アニマルウェルネスセンター：
〒956-0832 新潟市秋葉区秋葉2-14-68)

(2019年9月21日受付・2019年12月10日受理)

要 約

2歳齢、去勢済雄猫が、約2カ月続く頭部の脱毛と搔痒を主訴に受診した。初診時の肉眼観察において、頭頂部に厚い赤色の痂皮を伴う潰瘍性病変と、鱗屑及び毛包円柱を伴う脱毛性病変が混在性に認められた。病理検査において潰瘍性病変では表皮直下より皮下組織にかけて、おもに好酸球とマクロファージが浸潤していた。炎症巣内には、flame figureと呼ばれる好酸球浸潤を伴った膠原線維融解の所見が認められた。脱毛性病変では、軽度の表皮肥厚と正常角化性角化亢進を認め、皮脂腺周囲にはCD3陽性のT細胞とマクロファージが浸潤していた。以上から、本症例の皮膚病変を好酸球性皮膚炎及び皮脂腺炎と診断した。——キーワード：猫、好酸球性皮膚炎、皮脂腺炎。

-----日獣会誌 73, 107~110 (2020)

猫の好酸球性皮膚炎には、好酸球性肉芽腫群、外部寄生虫症、アレルギー性皮膚疾患などの疾患が含まれる[1-5]。好酸球性肉芽腫群は、無痛性潰瘍、好酸球性局面、好酸球性肉芽腫に分類されるが、いずれも原因の特定が困難な場合が多い。

皮脂腺炎は、皮脂腺の進行性の炎症性破壊に特徴づけられたまれな皮膚疾患である。犬では品種好発性があり、秋田犬やスタンダード・プードルでは、常染色体劣性遺伝様式が示唆されている[6]。一方、猫の場合、その発生はさらにまれであるため、報告がほとんどなく、その病因については明らかにされていない[6-8]。

今回、著者らは好酸球性皮膚炎と皮脂腺炎を認めた猫について、臨床経過と病理所見を報告する。

症 例

2歳5カ月齢、去勢済雄、スコティッシュフォールドが、11月上旬より頭部の脱毛と搔痒を主訴に、近医を受診した。定期的に2週間効果が継続する抗生剤の注射、1日2回の外用薬塗布及び月に一度のフィプロニルによるノミ・ダニ駆除剤塗布による治療を連続して2カ月受けていたが、まったく改善を認めず、1月中旬に当院を受診した。本症例は、発症前の生活環境として室内飼育であり、年に一度の猫3種混合ワクチン接種を受けてお

り、広く一般に流通している良質な総合栄養食を食べていた。

初診時の肉眼観察において、2種類の皮膚病変が形成されていた。1つは、頭頂部に広範に広がるものと背側頸部に数mm大で散在性に形成される厚い赤色の痂皮を伴うび爛から潰瘍性病変であり(図1)、他方は潰瘍性病変に隣接して背側頸部にび漫性に広がる鱗屑と散在性に存在する毛包円柱を伴う脱毛性病変であった(図2)。なお、これら皮膚病変は、背側頸部に限局性に形成されていた。

スクリーニングを目的に行った血液検査では、猫白血球ウイルス抗原/猫エイズウイルス抗体検査キット(アイデックスラボラトリーズ(株)、東京)に陰性、好酸球数の上昇(2,440/ μ l、参考基準値：100~790/ μ l)を認めた。胸腹部のX線検査及び腹部超音波検査では、特筆すべき所見は得られなかった。潰瘍部の皮膚押捺検査では、好中球を主体として好酸球が散在性に認められた(図3)。一部の好中球の細胞質内には、球菌の貪食像が認められた。毛検査では、休止期毛が比較的多く観察された。さらなる精査を目的として、皮膚パンチバイオプシーによる病理組織検査を計画した。組織採取は、上述した潰瘍性病変と脱毛性病変から6ないし8mm生検トレパン(カイインダストリーズ(株)、岐阜)を用いて計6

[†] 連絡責任者：小嶋大亮 (小島動物病院アニマルウェルネスセンター)

〒956-0832 新潟市秋葉区秋葉2-14-68 ☎0250-24-2223 FAX 0250-24-2366

E-mail : daisuke@animal-wellness.co.jp



図1 肉眼所見. 頭部皮膚では痂皮を伴うびらんないし潰瘍性病変が形成されている.

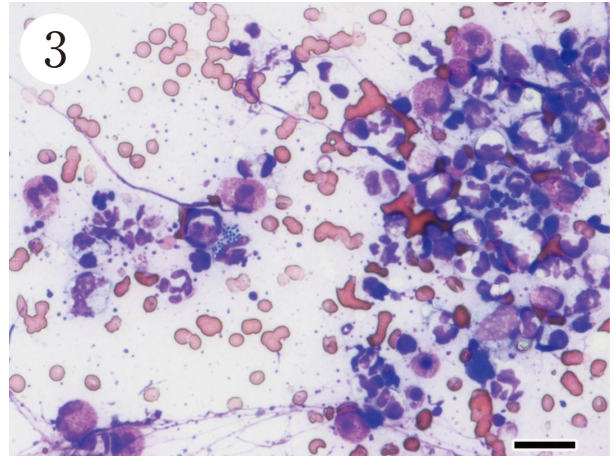


図3 潰瘍部の押捺細胞診. 多数の好中球に加え, 散在性に好酸球が観察される. 好中球には変性しているものも観察される (ライトギムザ染色 Bar=30 μ m).

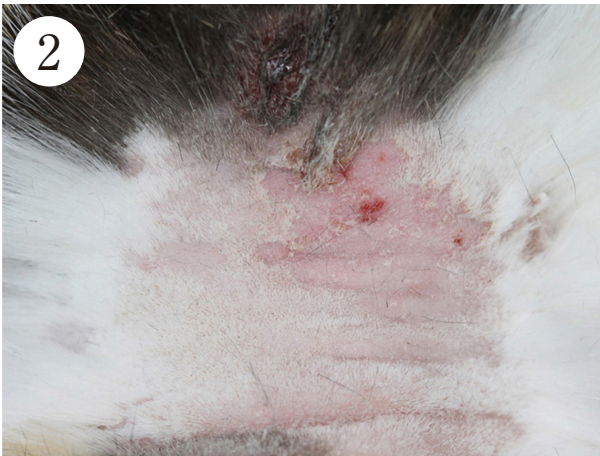


図2 肉眼所見. 頸部皮膚では大量の鱗屑を伴う脱毛性病変が形成されている.

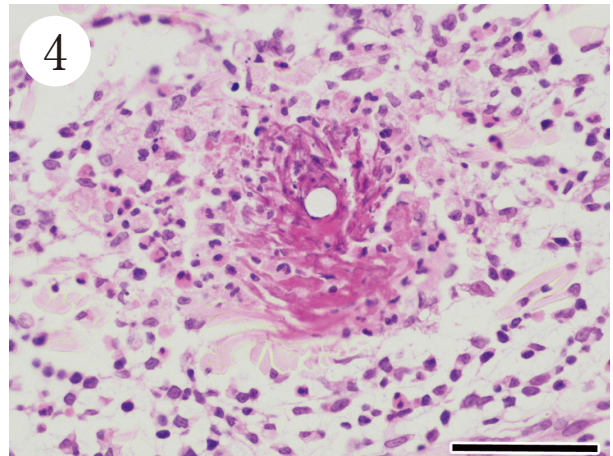


図4 病理組織所見. 中心に融解した膠原線維を認め, その周囲に脱顆粒した好酸球が浸潤している (HE 染色 Bar=50 μ m).

カ所から組織を採取し, 病理組織標本を作製した.

ヘマトキシリン・エオジン (HE) 染色において, 潰瘍性病変の最表層では細菌, 炎症細胞及び表皮の壊死残渣が層状に付着していた. 真皮から深部の皮下組織にかけては, び慢性に好酸球とマクロファージを主体とする炎症細胞が浸潤していた. 炎症巣には融解した膠原線維の周囲に脱顆粒した好酸球が浸潤していた (図4). 上述した好酸球については, ルナ染色によりその存在を確認した.

一方, 脱毛性病変では軽度の表皮肥厚と正常角化性角化亢進を認め, 真皮から皮下組織に関しては一部で皮脂腺が消失し, 休止期の毛包を認めた. また, それら毛包の周囲は水腫と線維化が生じていた (図5). また, 残存する皮脂腺及びその周囲にマクロファージとリンパ球を主体とする炎症細胞が浸潤していた (図6).

皮脂腺に観察されたリンパ球は, 免疫染色で抗 CD3

抗体 (Dako, Denmark) 陽性の T 細胞が主体であり, 抗 CD20 抗体 (Thermo Fisher Scientific, U.S.A.) 陽性の B 細胞は少なかった.

以上の検査所見から, 本症例は好酸球性皮膚炎及び皮脂腺炎と診断された. 治療は二次感染に対して, セフトラキサム (コンベニア注, ゼネシス・ジャパン (株), 東京) を, 抗炎症を目的として, メチルプレドニゾロン酢酸エステル懸濁注射液 1ml (デポ・メドロール 20mg, ファイザー (株), 東京) を, それぞれ単回接種した. 内服としては, 抗搔痒を目的として, クレマスタチンフマル酸塩 (テルギン G 錠 1mg, マルホ (株), 大阪) 1/2 錠, BID で処方した. また, 食物アレルギーの可能性も否定できないため, 療法食として, 加水分解大豆タンパク食 (低分子プロテイン, ロイヤルカナンジャパン (株), 東京) を処方した.

本症例は, バイオプシー後の抜糸のための 11 日後の

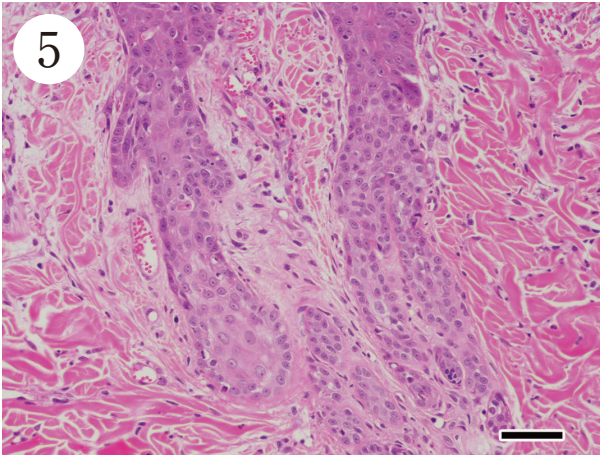


図5 病理組織所見. 皮脂腺は消失し, 毛包は休止期を示している. 毛包周囲には水腫が生じている (HE 染色 Bar = 50µm).

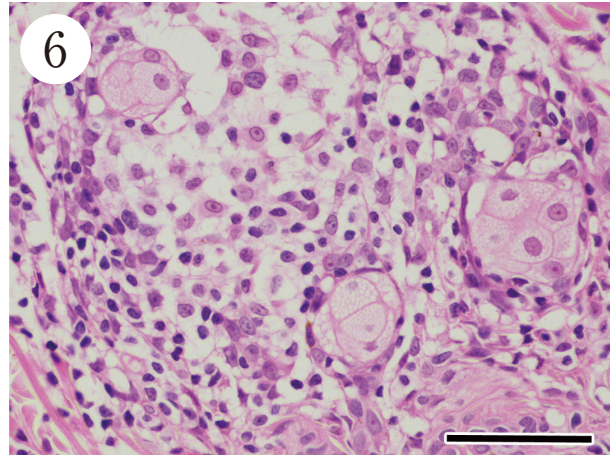


図6 病理組織所見. 皮脂腺房間及び周囲に多数のリンパ球とマクロファージが浸潤している (HE 染色 Bar = 50µm).

再診日には特に炎症部を中心とした皮膚症状は著しく軽減し, その3日後の再診では症状はほぼ消失した.

考 察

本症例では, 肉眼的に観察された頭頸背部の潰瘍及び脱毛部位において, それぞれ組織学的に好酸球性皮膚炎及び皮脂腺炎が観察された. 本症例で認められた好酸球性皮膚炎は, 典型的な好酸球性肉芽腫群の発生部位ではなかった. また, 外部寄生虫の刺咬による過敏症を検討したが, 本症例は発症時期が晩秋であること, 室内飼育であること, ノミ・ダニ駆除剤が少なくとも初期治療から行われていたことから否定的であった.

アレルギー性皮膚炎に関して, Hobiら [5] の報告によると, 猫の食物アレルギーの病変分布は頭頸部に形成される割合が高いことから, 本症例は矛盾しないと思われたが, アレルギー検査を実施していないため, アレルギーの関与については不明であった. その他の好酸球性皮膚炎を引き起こすまれな皮膚疾患であるヘルペスウイルス性潰瘍性皮膚炎や, 猫の好酸球増多症候群も臨床及び病理組織学的所見から否定した [10].

以上から本症例の好酸球性皮膚炎の原因特定には至らなかった.

猫の皮脂腺炎の発生はまれであるが, 全身にわたる多病巣性の鱗屑, 痂皮, 毛包円柱を伴う脱毛性病変であり, 組織学的には角化亢進を伴い, 皮脂腺の消失あるいはリンパ球とマクロファージを主体とする炎症細胞の皮脂腺への浸潤を認める [6-8]. 本症例の皮脂腺炎は, 病変分布が頭頸部に限局していたが, 肉眼的及び組織学的には過去の報告と同様の所見であった [6-8]. また, 免疫染色によりリンパ球はT細胞が主体であり, 犬と同様に細胞性免疫が関与する可能性があると思われた [6].

一方, 組織学的に猫の皮脂腺の消失あるいは炎症を認めた場合に, いくつかの疾患と鑑別する必要があり, 猫の胸腺腫剥奪性皮膚炎や, 猫の変性性ムチン沈着性壁性毛包炎が重要である [11-13]. 前者の場合, 境界部皮膚炎を伴うことや画像検査から前胸部に腫瘍性病変が観察されるが, 本症例では否定的であった [11, 12].

一方, 後者ではFIV陽性猫で発症すること, 発症猫に嗜眠傾向があること, 及び肉眼的に全身性脱毛と皮膚の顕著な肥厚を生じることから鑑別された [13].

本報告では, 好酸球性皮膚炎及び脂腺炎が観察されたまれな猫の症例を報告した. 今後, 両病変の発症要因や関連性について, さらなる検討の余地がある.

本報告を行うにあたって, 病理組織標本作製を行っていた(有)パソラボに深謝する.

引用文献

- [1] Mason K, Burton G: 好酸球性肉芽腫症候群, 猫の皮膚科学, 小方宗次監訳, 12, 1-10, メリアル・ジャパン, 東京 (2002)
- [2] Medleau L, Hnilica KA: その他の皮膚疾患: 猫, 犬と猫の皮膚疾患, 岩崎利郎監訳, 第2版, 346-351, 文永堂, 東京 (2007)
- [3] Mauldin EA, Kennedy JP: Integumentary system (feline eosinophilic granuloma complex), Jubb, Kennedy, and Palmer's pathology of domestic animals, Maxie MG ed, volume1, sixth edition, 693-694, Elsevier, Missouri (2016)
- [4] Yager JA, Wilcock BP: 結節性および/または広汎性の好酸球性皮膚炎, 犬と猫の外科病理学 皮膚病理学と皮膚の腫瘍, 大町哲夫訳, 146-149, New LLL出版, 大阪 (2002)
- [5] Hobi S, Linek M, Marignac G, Olivry T, Beco L, Nett C, Fontaine J, Roosje P, Bergvall K, Belova S, Koebrich S, Pin D, Kovalik M, Meury S, Wilhelm S, Favrot C: Clinical characteristics and causes of pruritis in cats:

- a multicenter study on feline hypersensitivity-associated dermatoses, *Vet Dermatol*, 22, 406-413 (2011)
- [6] Gross TL, Ihrke PJ, Walder EJ, Affolter VK: 角化異常を伴う疾患 (皮脂腺炎), 犬と猫の皮膚病, 日本獣医皮膚科学会監訳, 第2版, 190-192, インターズー, 東京 (2009)
- [7] 犬飼久生, 磯村 洋: 組織学的に皮脂腺炎を呈した猫の1例, *獣医臨床皮膚科*, 13, 13-15 (2007)
- [8] Mauldin EA, Kennedy JP: Integumentary system (Sebaceous adenitis), Jubb, Kennedy, and Palmer's pathology of domestic animals, Maxie MG ed, volume 1, sixth edition, 551-552, Elsevier, Missouri (2016)
- [9] Gross TL, Ihrke PJ, Walder EJ, Affolter VK: 表皮の潰瘍性および痂皮形成性疾患 (猫のヘルペスウイルス性潰瘍性皮膚炎), 犬と猫の皮膚病, 日本獣医皮膚科学会監訳, 第2版, 127-129, インターズー, 東京 (2009)
- [10] Gross TL, Ihrke PJ, Walder EJ, Affolter VK: 好酸球, 好中球あるいは形質細胞主体の真皮の結節性および慢性疾患 (猫の好酸球増加症候群), 犬と猫の皮膚病, 日本獣医皮膚科学会監訳, 第2版, 367-368, インターズー, 東京 (2009)
- [11] Gross TL, Ihrke PJ, Walder EJ, Affolter VK: 表皮-真皮境界部の炎症性疾患 (猫の胸腺腫関連性剝奪性皮膚炎), 犬と猫の皮膚病, 日本獣医皮膚科学会監訳, 第2版, 70-72, インターズー, 東京 (2009)
- [12] Cavalcanti JV, Moura MP, Monteiro FO: Thymoma associated with exfoliative dermatitis in a cat, *J Feline Med Surg*, 16, 1020-1023 (2014)
- [13] Gross TL, Ihrke PJ, Walder EJ, Affolter VK: 毛包壁の疾患 (猫の変性性ムチン沈着性壁性毛包炎), 犬と猫の皮膚病, 日本獣医皮膚科学会監訳, 第2版, 475-477, インターズー, 東京 (2009)

Eosinophilic Dermatitis and Sebaceous Adenitis in the Head and Neck of a Cat

Daisuke KOJIMA[†], Kyoko KOJIMA, Kazumi OTA and Yoshihiko KOJIMA

**Kojima Animal Hospital Animal Wellness Center, 2-14-68 Akiha, Akiha-ku, Niigata, 956-0832, Japan*

SUMMARY

A 2-year-old castrated male cat presented with alopecia and itching on the head for approximately two months. Macroscopically there were ulcerative lesions with reddish crusts and alopecia with dander and follicular casts on the skin of top of the head and neck. Histologically, there were diffuse infiltrates of eosinophils and macrophages from the superficial dermis to subcutaneous tissue. In the inflammatory lesions, collagenolysis with eosinophilic inflammation called flame figures was occasionally observed. In the alopecic lesions, there was mild epidermal hyperplasia with orthokeratotic hyperkeratosis. In addition, multiple sebaceous glands were surrounded by CD3-positive T cells and macrophages. Based on these histological findings, the cutaneous lesions of the present case were diagnosed as eosinophilic dermatitis and sebaceous adenitis.

— Key words : cat, eosinophilic dermatitis, sebaceous adenitis.

[†] *Correspondence to : Daisuke KOJIMA (Kojima Animal Hospital Animal Wellness Center)*

2-14-68 Akiha, Akiha-ku, Niigata, 956-0832, Japan

TEL 0250-24-2223 FAX 0250-24-2366 E-mail : daisuke@animal-wellness.co.jp

J. Jpn. Vet. Med. Assoc., 73, 107~110 (2020)